

四国農学連報

第 29 号

発 行 者 学 校 農 業 大 学 連 盟
四 国 地 区 農 業 大 学 生 自 治 会
編 集 校 農 業 大 学 生 自 治 会
香 川 県 立 農 業 大 学 生 自 治 会

農大の2年間で学んだこと

四国地区農業大学校学生連盟会長
香川県立農業大学校学生自治会長

山 本 紘 輝



私は、農業
大学校に入学
しましたが、
高校では、農
業の栽培では
なく農業土木

の測量を学んでいました。高校卒業後の進路を考えるにあたり、コロナ禍であったため、県外にある測量の学校はあきらめ、県内での進学を考えていました。そんな中、友人のお兄さんが香川県立農業大学校に通っているのを知り、農業大学校での学習や実習の内容を調べて興味を持ちました。また、夏のオープンキャンパスに参加し、歴史ある校舎や、たくさんの実習施設を見学したところ、高校と比べハウスや畑が多く、農業分野で多くのことが学べるのではないかと希望をもって農業大学校に進学することにしました。

母方の祖父が兼業農家を営んでいま

したので、私は幼い頃から田植えや稲刈りの手伝いに行き、農業に親しみを感じていました。一方で台風が接近すると水稲が倒伏するなどの被害を受けることもあり、農家は大変だなと思っていた。祖父が育てた米や野菜を食べて「おいしい」と言った時の祖父のうれしそうな笑顔は今でも忘れられません。

農大では仲間とともに大変充実した2年間で過ごすことができました。多くの学びや体験の中で、特に心にのこったことに自治会長に選ばれたことが挙げられます。自治会長になったとき、前任の自治会長から次年度の自治会長に推薦を受けたためです。声をかけられた時は「スポーツをしてみんなと楽しんだらいいや」くらいの気持ちで了承しましたが、実際はいつもの学生自治会活動に加えて、香川県が四国農学連の当番校としての活動もあり、次々と行事があることを後で知りました。

実際、やってみると自分一人ではなく、学生自治会の役員をはじめ、たくさん

の仲間が一緒になって、行事の企画や準備の役割分担を決め支えてくれました。

一〇月五日には四国農学連の大きな行事でもあるスポーツ大会が実施されました。新型コロナウイルスの影響で、二年続きで中止となっていました。が、今年度は、ようやく開催する事ができました。当日は、雨天で、野球は泥だらけとなりながらの試合でしたが、中止することなく決勝戦まで全ての競技を終える事ができました。私は、バレーボールに出場しました。優勝した高知農大チームにフルセットで負けて、涙をのむ結果となりましたが、接戦が縁で閉会式後は優勝トロフィーを持たせてもらい合同写真を撮るなど他校と触れ合ういい機会となりました。

一〇月下旬に開催された農業大学校の収穫祭では、コロナ禍のため学内だけでの行事となりました。自分達でバザーの準備をし、どうすれば効率よく作業できるか、試行錯誤を重ねました。私のグループではフライドポテトを作りましたが、料理に不慣れな人が多く、揚げ時間やどんなペースで調理していくかの時間配分が難しく感じました。他のブースも大盛況で、みんなに楽しんでもらえて、いい思い出となりました。

私は、一年生の時に農業技術の基礎を実習として学校は場で学び、二年生は専攻実習として卒業論文のテーマを絞り外部の生産者の現場は場で学んで

います。実習を始めてみるといろんな作物の技術を習得できるので勉強がさらに面白くなってきました。卒業後は、JAに就職します。職場は農機センターを希望しています。目標は点検整備や修理技術を向上させ、組合員から信頼される職員になることです。生産現場を理解したうえで、二年間の学びを機械整備に活かしたいと思っています。

今までの学校生活で初めて会長と名の付く活動をしました。が、たくさんの人々の助けがあつてこそ、成し遂げる事ができたと思います。これからも一人では難しいことでも、周りの人々と協力して、知恵を出し合い、問題を解決して、目標を達成していきたいと思っています。大切な仲間と過ごし、学び、経験した二年間は、とても有意義な時間となりました。



農学連スポーツ大会のバレーボール部チーム

四国四県の連携を目指して

香川県立農業大学校 校長

仲本 孝幸



四国四県の農業大学校学生自治会による「四国地区農業大学校学生連盟」(以下、四

学連)によるスポーツ大会が去る一〇月五日、三年ぶりに開催されました。参加及び開催協力していただきました各校の学生や教職員の皆さんをはじめ競技審判や会場設営でお世話になった関係の皆様に対してこの場をお借りしてお礼申し上げます。体育館や野球場で四国四県の学生が若さを爆発させて躍動する姿を見て改めて開催してよかったと感じているところです。

さて、各都道府県の事情によって大学校の形や名称などは様々ですが全国には民間を含めて四七の農業大学校が「全国農業大学校協議会」に加盟しています。さらに地域ごとに五つのブロックに分かれて意見発表会やプロジェクト発表会の選抜大会を実施しているのは皆さんご存じかと思えます。スポ

ーツ大会を例にとってもコロナ前の規模で開催できておらず、九州ブロックのある農業大学校においては近隣の二校で合同行事としてスポーツ行事を開催したり、ある県では校内で駅伝を実施するなど工夫して運営をされているようです。一連のコロナ禍で農業大学校だけでなく日本全国のおよそ学校と名の付くところは様々な行事を縮小したり代替行事としたり知恵を絞って乗り越えてきていると思われます。香川農大でもスポーツ大会の代替行事として「校内スポーツ大会」を、毎年実施していた「農大ふれあい市」は「校内収穫祭」という学内行事として学生自治会が主催して実施されています。私見ではありますが、行事の規模縮小はやむを得ないところである反面、コロナ前と比較して香川農大の学生の皆さんの自主性や企画力が高まっているようにも見受けられ、頼もしく思っています。

四学連以外の農業大学校ではスポーツ大会一つとっても移動距離が大きい、加盟校すべての参加が困難であるとか、日帰りでは不可能であるなど、コロナ前に戻すのは時間がかかりそうな状況だと聞いています。半面、四国四県は移動距離も少なくて日帰りで一か所に集まれることから、意見発表会やスポーツ大会など四学連行事をほぼ従来の形に戻すことができました。今後は少し前に実施されていた二校あるいは三校のスポーツ交流戦を復活させるのも一案です。スポーツ大会で熱戦を繰り広げたチーム同士のリベンジマッチもやれそうです。せっかく一度コロナ禍で立ち止まったのですからこの際、新しい取り組み(別の競技、フットサルや駅伝といった新種目や文系の交流戦、将棋やかるた、オセロとかeスポーツやオンラインゲーム等々)を企画して新たな仲間づくりの輪を広げてみるのも楽しそうです。

さらに、農林水産省のホームページを見ると全国農業大学校協議会の加盟校以外にも農業を学べる学校や施設といるのが意外と多いことに気づきます。四国内だけでも担い手育成センターや林業系の大学校やアカデミーといった研修施設などもあります。将来的にはこのようなところとも交流したり連携したりすることができれば学生の皆さんの視野や選択肢も広がると思います。農業大学校時代の二年間というものは意外と短いものではないでしょうか。ぜひ農林業に関わろうとする同志の交流や仲間づくりに取り組んでもっと濃密な二年間となるよう期待しています。将来農業以外の仕事に就いたとしても四国四県の特徴やいいところ、優れた産地の特産品や写真映えるスポットなど地域の様々な情報を知っていることが社会人として成長していくうえで大きな強みになると思います。

自分たちの住んでいるところや四国という地域の実情を知るチャンスのを育てることのできるのが農業大学校時代の二年間であり、その仲間づくりなのだと思えます。社会に出たときに農業大学校時代の経験が役に立つよう頑張れ農大生!



農業大学校での二年間

徳島県立農林水産総合技術

支援センター農業大学校

農業生産技術コース 二年

竹原 成海



徳島県立農
林水産総合技
術支援センタ
ー農業大学校
に入学して、
はや二年が経

とうとしています。私は普通科高校出身で、高校では三年間自然科学部に所属していました。そんな私が農業大学校を志すきっかけになったのは、家業の稲作です。私の家は兼業で稲作をしており、私自身も幼少期からトラクターやコンバインに乗って、手伝っていました。手伝ううちに、より深くより実践的に水稻栽培の知識や技術を学びたいと思い農業大学校に入学を決心しました。

入学してしばらくの間は、専門用語の多い講義や実習に苦労しました。実習では、様々な野菜に触れましたが、収穫の仕方や脇芽取りなど初めてのことが多く、最初はどうすれば良いのか分からないことも多かったですが、先生方や周りの同級生に教えてもらいながら、少しずつできることが増えていきました。また、二年次生になってからは、本格的にプロジェクト研究が始

まり、当初からの目的であった水稻栽培についての研究に力を入れて取り組みました。具体的にはシンジェンタジャパンのリゾケアエクセル種子を使用した水稻湛水直播栽培についての研究です。徳島県内では高齢化や後継者不足によって耕作できなくなった農地を、地域の中核となる農業生産法人が請け負っており、その作付面積は年々増えてきています。一方、昨年から続く資材費の高騰や米価の下落は、経営に大きな影響を及ぼしています。これらの現状を踏まえて、これからは低コストや省力化できる栽培体系が求められます。そこで水田に直接播種でき、育苗・移植作業が省略できる湛水直播栽培に着目しました。

五月にリゾケアエクセル種子を乗用播種機で点播し、播種直後は、本当に芽が出るのかと心配でしたが、播種後一週間目には無事芽が出たのを見てホッとしたのを今でも覚えています。その後も順調に生育していき、倒伏のリスクもありましたが、強めの中干しを生育の初期と中期にすることで台風が来ても倒伏することもなく、無事に収穫を迎えることができました。実際に施肥設計から日々の水管理、収穫までの一連の作業を自分で行なったのは初めてだったので、不安なこともありましたが担当の先生方や同じ水稻のプロジェクトを行なっている同級生の手助けもあってやりきることが出来ました。この経験も農業大学校に入学

していなければ出来なかったことだと思います。

知識や技術の習得を目的に入学を決めた農業大学校ですが、今となっては何気ない学校生活もあと少しかと思うとなんだか寂しく感じます。そして、こうして大学生活を送れるのも家族の支えや、二年間ともに過ごした同級生、先輩、ご指導いただいた先生方のおかげだと、全ての人に感謝の気持ちでいっぱいです。農業大学校卒業後は徳島県職員として、農業大学校で学んだ知識や技術を活かし、水田農業の振興に携わり県下の農家や農業を支援していきたいと考えています。また、それと同時に実家の米作りも今まで以上に積極的に関わり、将来的には耕作放棄地や離農される農家から農地を引き継ぎ、規模拡大を行い地域の農業を維持・発展させていきたいと考えています。農業大学校での二年間は私にとってかけがえない思い出で、一生の財産です。



作業風景

徳島農大「そらそうじゃ」役員として臨んだ農大祭

徳島県立農林水産総合技術

支援センター農業大学校

6次産業ビジネスコース 二年

濱岡 楓斗



徳島農大には、「そらそうじゃ」という模擬会社があります。「そらそうじゃ」

は、学生主体で模擬的に会社経営を行い、経営の仕組みを学ぶために設置された組織です。役職は、社長、副社長、品質管理部長、営業部長、企画部長、経理部長があり、社員は農大生全員です。入学当初「そらそうじゃ」の説明会があり、その内容に高い関心を抱いた私は、そこで中心となり活動してみたいと感じたのです。説明会から一年が経とうとしている三月に、私は先輩方から副社長を引き継ぎ、これまで活動を行ってきました。

副社長の主な仕事内容は、社長とともに会社経営全般の管理を行うことです。今年度は、新型コロナウイルスの影響が和らぎ、再び「そらそうじゃ」の活動が活発になりました。校内外での販売活動も増え、昨年度より忙しい日々となりました。中でも特に大変だったのが「農大祭」です。農大祭は、学生自治会が主催するのですが、農産

物の販売は「そらそうじゃ」が担っています。農大祭に際し、私は副社長として二つの仕事を任せました。一つは農大祭当日のシフト表作成、もう一つは餅と赤飯の製造責任者です。

シフト表作成は、社長と副社長を除いた、学生六十六名の農大祭当日の役職を一時間ごとに分ける作業です。この作業で大変だったのは、学生のシフト調整です。新型コロナウイルスの影響を受けた学生が複数いたため、農大祭前日までシフトの調整が続き、農大祭当日は、シフト表を、学生全員に配布。農大祭当日は、シフト表をもとに業務を円滑に進めることができました。

続いて餅と赤飯の製造では、外部委託をして販売していた去年までとは違い、今年度は学生が一から作り販売することになったのです。私が責任者となり担当教員の指導を受けながら十名の学生で作りました。餅と赤飯は農大祭の人気商品であるため責任重大です。農大祭当日、午前七時から製造を行い、午前十一時と午後一時の二回に分け販売しました。社員(学生)の中には、午後からは客足が減り、思うように売れないのではという意見もありましたが、次年度の農大祭の参考になるよう午後からも販売することにしました。午前に販売した商品は、私の予想を超える勢いで売れ、十分程度で完売しました。農大祭の餅と赤飯の人気を再確認することができたのです。問

題となっていた午後の販売ですが、当日は販売する前から多くのお客様が並ぶこととなり、午後からでも十分販売できると実感。販売は順調に進み完売することができました。

一方、今回の販売で、反省点も見つけられました。レジの数や、販売の方法などです。これらの課題点を私なりに整理し、後輩に引継ぎ、さらに良い農大祭になってほしいと思っています。

今年度の「そらそうじゃ」は新型コロナウイルスの対策を講じながらではありましたが、餅と赤飯の販売など新たに行ったことがたくさんありました。今後の「そらそうじゃ」がさらに発展するよう、これまでの活動をしっかりと振り返り整理し、この想いを後輩へ引継ぎたいと思います。



そらそうじゃ県外研修

地産地消から知産知消へ

徳島県立農林水産総合技術

支援センター農業大学校

農業生産技術コース 一年

池村 駿 佑



私は、農業大学校を卒業した後でJ A等の農業団体や法人に所属し、農業の文

化を地域に広げ、より身近に感じてもらいたいという事業に取り組んでみたいと考えています。そして、このような活動を通じて地域住民や消費者に農業の重要性を知ってもらいたいと思っています。

私は、多くの消費者が考えている農業と現実の農業にギャップがあるのでないかと思っています。私はかつて、値段ばかり気にして食品を購入していました。しかし、農業高校や農業大学校で農業を学び、農産物の栽培方法や流通、販売の方法を知るうちに、一つのトマトにも農家の思いやこだわりがあると気づいたのです。

そして、調べるうちに、私は「食」と「農」の分断」という問題が農業と消費者の間にあるのではないかと考えました。例えば地産地消で言えば、消費者が地元産の農産物を「消費する」という部分だけが意識され、その栽培の過程にまで思いが至っているのだから

うかと疑問を感じたのです。先に述べたような行動をとる限り、「食」と「農」の関係について意識を高めることはないと私は考えています。

この「食」と「農」の分断を埋めることが地域農業には必要です。なぜなら、消費者が農家の苦勞を知らなければ、「食」を生み出す農業を円滑に行えないからです。多くの農家は、周辺地域に非常に気をつかいながら農作業を行っています。農家が農業をしやすい環境を整えるには、何よりも地域住民との相互理解が大切です。消費者が自分たちの消費している農産物を知る、その農産物が作られたこだわりや過程を知る、まさに「知産知消」ともいえる取り組みを行うべきなのです。消費者には農業生産の現場に目を向け、農家の声に耳を傾けてほしいです。同じように、農家も消費者の目線に立って自分たちの農作業や農産物の出来栄を見つめなおし、消費者からの意見も参考にしてほしいと思います。

私が通っている農業大学校には「そらそうじゃ」という模擬会社があります。

「そらそうじゃ」では学生が主体となり、農業大学校で収穫できた農産物やその加工品などを、地域住民に向けて販売したり、農業体験サービスなどを行っています。

この仕組みを活かして、私は来年度の農大祭では、より深く農業を知ってもらうために栽培や収穫の体験を開催

してみたいと考えています。自らの手で農作業がどのようなものか体感してもらえれば「農」の重要性を理解してもらいやすいはずです。

私は冒頭で、「農業の文化を地域に広げ、より身近に感じてもらうような事業に取り組んでみたい」と述べました。そこで、地域住民の「食」と「農」の理解を深めるために考えたのが、農作業をアルバイトとして地域住民に紹介し一緒に働いてもらうという事業です。本県でもすでに取り組んでいる地域はありますが、これは、農家の労働力不足を補い、農産物の生産力の強化を見込めるだけにとどまらず、農家と消費者の相互理解を高めるために有効だと考えています。消費者側は農業の実態を身をもって体感し、農産物は苦勞して生産されているのだと知ること、農家の思いが伝わります。農家側

も、消費者の意見や発想を聞くことができる機会になるし、ここから普段の生産における技術や農産物の品質向上につながるかもしれません。

無論、消費者にとっては迷惑になっていた農作業も改善点が見つかると思います。私は、この事業が地域住民と地域農業を結ぶことになると考えています。

私は卒業後、まずはJ.Aに就職し、このような事業に取り組んでみたいと考えています。将来は、農業法人に就職し、経験を積んだ後、トマト農家になろうと思っています。トマトの栽培を通じて農業のよさごとと大変さを伝え、一人の生産者として「食」と「農」の重要性を伝えていきたいと思っています。

農大の実習で学んでいること、生かしたい事

徳島県立農林水産総合技術

支援センター農業大学校

6次産業ビジネスコース 一年

奥 俊 輔



私は、徳島県の職員として、公的な立場から「徳島の農家の方々の力になったり、農家の発展に貢献したい」という目標があります。なぜなら、加工業もサービス業もその根幹を成すのは第一次産業であり、中でも農業は、人間の「食」を支える大事な役割を担っています。そんな農業に従事する方々を、公的な立場からサポートできるようにしたいと私は思っています。そのために、まず農業のノウハウを実習を交えながら学びたいと思います。徳島農業大学校に進学しました。

農業大学校に進学し、実習を経験して一番最初に感じたことは、農作業の大変さです。私が通学していた高校は、農業高校ではなく、普通科のみの高校で、さらに私は運動部にも所属したことがなかったため、実習が始まってからしばらくは、体力的に大変な日々が続きました。しかし、それ以上に高校では体験できなかったような実習や、新たな発見からくる楽しさが勝り、苦痛に感じることはありませんでした。むしろ、農業にますます魅力を感じるようになりました。

新たな発見というのは、作業中に行う作物ごとの小さな工夫が、栽培において重要な役割を果たしていることです。例えば、サツマイモの苗の植え方によって最終的な収量に変化したり、スタチの着色量にムラが生じないように、成った果実を日光に等しく当てるために、果実の上の葉を摘む「摘葉」という作業があったりします。一般的には、余り関係がなさそうに見える些細なことが、作物の仕上がりに大



校外研修

きな影響を与えるのです。普通科高校出身の私にとっては、毎日が驚きの連続です。そして、傍からみれば一見地味なことでも、実際に行うには、「技術」と「経験」が必要で、かなり大変な作業です。それでも、細かな作業を怠らず、作物をより良いものにするために、地道な努力と様々な工夫を凝らしている生産者の方々は、本当にすごいです。農大に進学し、実習が始まってから半年が経ちます。同じ作業を繰り返している行っても、興味を引かれることが毎回あります。その中でも私は、虫の生態にも関心があり、果樹に大きな被害を及ぼすことのあるカメムシ類の防除に、天敵昆虫を利用するという講義に、特に魅力を感じました。

戦後復興のために、大量に植えられたスギやヒノキの影響で、1990年

頃を境にカメムシ類による被害が、爆発的に増加しました。その被害を防ぐために、農薬だけではなく、カメムシの天敵を利用する方法が紹介されていました。高い有効性を誇る「寄生蜂」や、一定の効果が報告されている「シヘンチュウ」、徳島県では特に高い効果が見られる「ヤドリバエ」などの天敵を効果的に利用するために、特定の農薬の使用を制限することや、天敵の棲み処となる植物を植えて、生存・繁殖を促すことが大事だという説明がありました。作物を害する病害虫の防除方法は、果てしない研究と数々の実験、そしてその方法が周囲の生態系へ与える影響を考慮した上で実用化させることが、どれほどの努力を要するかという事を肌で感じました。

このように、農業というのは、農作物そのものから害虫、そしてその天敵に至るまで、実に幅広い分野を扱います。困難なことも多いですが、その分やりがいがあり、魅力的です。そしてまた、農業には、高齢化、担い手不足、耕作放棄地など様々な課題があります。このような課題の解消に向けて、一步一步、前進することが大切です。そのためにも、私は県職員となつて、現場目線から農家を支え、徳島の農業の発展に貢献したいです。私は、農業に関わる人間として、現在、農業が直面している問題に対して真摯に向き合い、農家の方々と一緒に問題解決に取り組むことができる県職員になりたいと思

っています。



自治会長としての1年

愛媛県立農業大学校

総合農学科二年 農産園芸コース

学生自治会長

大塚 幸生



私の家は農家であり、幼い頃から農業の手伝いをしていくなかで農業に興味

を持ち、もつと農業の知識を身につけたいと思い農業大学校に入学しました。そんななか、昨年2月に皆さんに支持

をいただき、本校自治会長に任命されました。とはいっても、まだまだ新型コロナウイルスの影響が懸念されており、今年もどこまで学校行事ができるのか不安でした。しかし、今年は感染症対策の徹底などをする中で、四国農学連スポーツ大会や収穫祭などの一部の行事は行うことができました。

四国農学連スポーツ大会では、四国4県の農大生が集まり、バレー、卓球、バドミントン、軟式野球を行いました。各部とも優勝を目指して、部長を中心に練習日程を立て放課後などの空き時間を使い練習を頑張りました。当日は、他の県の農大生と真剣に競技に取り組み、また、試合を通じて交流を深めることができたと思います。結果は、軟式野球、卓球で優勝、バレーは準優勝、バドミントンは惜しくも入賞することができませんでした。が、皆さんが、皆楽しく競技をすることができました。

収穫祭は、今年は規模を縮小しながらも3年ぶりに開催できました。私も初めてのことで「準備はしつかりとできるのか」「お客さんは来てくれるのだろうか」など、とても不安がありました。準備では、学生が役割分担をして、色あせてしまった看板をスプレーで色鮮やかにし、各専攻班では、今まで丹精込めて作った花や野菜や果樹の収穫、調整を行いました。野菜は、サツマイモをはじめとし、キャベツやレタス、ブロッコリーなど16品目、米は、学校で育てたあきたこまち、果樹は、

柿や新高、シャインマスカットなど5品目、花きは、パンジー、ビオラなど21種6千株を用意しました。また、農薬散布ドローンやトラクター、ラジコン操作の草刈り機などスマート農機の展示、学生バザーでは、学校で育てたシャインマスカットを使ったフルーツサンドやレモンケーキ、スノーボールクッキー等、農業の6次産業化に向けた加工品も販売しました。当日は、それぞれのテントに長蛇の列ができるほどたくさんのお客さんに来ていただき、各販売ブースとも、たくさんの商品が売れ、大盛況でした。今回、私たちは、収穫祭の経験がなく、ゼロからの取り組みではありましたが、学生だけではなく、教職員の方々の御協力もあり、この収穫祭を大成功に終わらせること



3年ぶりの開催となった収穫祭

ができました。来年も収穫祭が開催されるのであれば、今年の反省点を生かし今年以上に盛り上げていってほしいです。

今年度は四国農学連スポーツ大会や収穫祭など多くの行事をすることができました。経験の少なさなどから上手いかなこともあったと思います。しかし、そんななかでも工夫をしたり、仲間と助け合ったり多くの経験を積むことができ、この愛媛農大での大きな思い出となりました。

私は将来いつか実家の農業を継ぎたいと考えています。この愛媛農大で実習や座学、先進農家体験学習などを経験して培った技術や能力、知識を生かし消費者のニーズに答えられるような生産者となり、また、地域と連携をして地域の活性化にも繋げていきたいと思っています。

最後になりますが、この1年間自治会長として活動をしてきて、多くの仲間たちや教職員の方々に支えられることだけでしたが、無事に今期の任期を終えることができました。本当にありがとうございました。卒業後はみんなそれぞれの道を歩むことになりましたがそれぞれの信念に従い後悔の無いようお互いに頑張っていきたいと思います。

農業経営者に向けて

愛媛県立農業大学校

総合農学科二年 農産園芸コース

中原 啓 輔



私が農業に興味を持ち始めたのは幼少期の頃でした。祖父母の小さな畑を手伝う

中で植物を育てる楽しさを感じ、関心が深まってきました。このような興味や関心から、農業を学ぶ道を歩むことを決めました。

高校から農業に関することを学び、卒業後も農業大学校へ進学しました。農業大学校では、今まで私が体験した農業とは全く別の農業を学んでいました。今までは、少しの興味だったものが学問へと広がり、一方で、本格的な



プロジェクト活動

実習を経験する中で、農業の大変さを痛感させられました。

また、2年時にいった先進農家での15日間の研修(前期10日間・後期5日間)は、私の農業に対する価値観に大きな影響を与えました。今まで作物を育てることが農業だと考えていました。しかし、この研修を通し、農業は生産することも含めて、経営していくものだと思えるようになりました。能率よく生産していくことは当たり前のことであり、より重要なのは販路や経営形態です。これらが整っていないければ、生産量が多くても消費されることはありません。そのため、今までの農業観では、職業として農業に携わっていくことは難しいと感じるようになりました。

今の私は、豊富な実習経験はありますが、経営に対する学びは薄い状態にあります。そのため、卒業後は、本校のアグリビジネス科で、さらに1年間農業について学ぶ予定です。そして、この1年間で農業を経営する力を身に付けることで、自身の将来につながる農業プランを作っていきたいと考えています。今は不十分な経営面について学ぶことで、将来就農する力を身に付けていき、幼少期の夢である農業に携わっていきたいです。また、講義や農家の元でのインターン実習を通し、農業について学びを体験していき、経営能力を備えた農家になれるようにしていきたいです。日々目標を持つことを

忘れず学習をし、夢みた農業経営者へとなっていきたいと思います。

世代をつなぐ架け橋に

愛媛県立農業大学校

総合農学科一年 農産園芸コース

大石 響 己



非農家出身である私は、幼い時に身近なところに農業があった訳ではなく、

中学校の学校農園で野菜栽培を経験する職業体験で農業に初めて接しました。そこでの年間を通じて行った播種、灌水、施肥の作業がどれも新鮮で、特に収穫作業では、これまでにない充実感を味わい、農業を意識するようになりました。

地元農業高校に進学した私は、野菜コースを選択し、班の課題研究では「野菜の垂直仕立て栽培」に取り組みました。苗の近くに立てた支柱に茎、葉、腋芽、つるなどを全て上向きに縛り誘引する栽培方法は、それまでに授業や実習で習った内容とは異なりしました。さらに、この栽培方法で栽培されたトマトは酸っぱさが弱く甘く感じたことから、その理由を知りたいと思い本で調べるも内容が難しく理解できま



農産園芸コースの仲間とともに

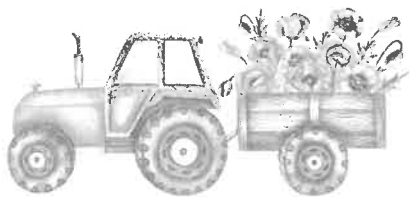
せんでした。

しかし、この体験は私に農業の世界が教科書以外に広がっており、学ぶことがたくさんあることを教えてくれたもつと高度な農業を学びたいと思うようになり、私が農業大学校に進学する大きな理由となりました。

私には、将来、農業と高齢者福祉と児童福祉の連携による新しいタイプの農福連携に取り組んでみたいという夢があります。私の親は介護職で、よく職場の話をしていて、「高齢者の方が活躍する場を作りたい」という話を聞いていました。そこで、その活躍できる場として、作物を栽培するのはどうだろうと思いました。また、私は将来保育士になることを考えていた時期が

あり、子供たちが農作業体験できる場を作りたいと思っていたこともあり、この農福連携の夢ができました。具体的には、私が作物を栽培している農地に、デイサービスセンターなどの福祉施設を利用して高齢者を招き作業をしてもらい、収穫日には児童福祉施設などで生活している子供たちにも手伝ってもらいます。そうすることで、元氣な高齢者の方々には生きがいを感じてもらい、子供たちには、かつての自分がそうであったように農業体験を通じて農業の魅力や楽しさを理解し、ほんの少しでもいいので興味を持ってもらえればと思います。

そして、このような体験をした子供たちが将来農業を志してくれば、農業の担い手確保にも寄与できるのではないかと考えています。私は、このような取り組みを通じて、高齢者と子どもたちの世代をつなぐ架け橋になりたいと思っています。



百年先まで続く農業を

目指して

愛媛県立農業大学校

総合農学科一年 農産園芸コース

渡部 和



私の家は、松山市の郊外で代々米、麦、野菜を作っている農家で、私も幼いころから祖父母が営む農業の手伝いをしてきました。しかし、その祖父母も年を取るにつれて栽培品目が少なくなり、畑に草が目立つようになりました。また、周辺の農家も同じで、小学生の頃は初夏になれば麦が熟れて、秋になれば稲が熟れて色がね色に染まった大地が風に揺らぐ風景を見ることが当たり前でしたが、今、そこに見られるのは、雑草に覆われた荒地や開発されて広がる住宅地です。どの農家も、後継ぎがいらないからとか、もう儲からないからと、農業を辞め、農地を手放していったのです。

そんな中、私は先祖が守ってきた農地を守りたい、幼いころ見た風景を残したいの思いから、農業高校に進学することにしました。高校では、バイオテクノロジー班を選択し、蘭の無菌播種や茎頂培養などの実習を通して、屋外での作業だけが農業ではないことと、作業を行う上での計画性の重要さ

を知りました。しかし、自分がしたい農業についての具体的な計画を描くことができず、祖母から将来のことを尋ねられましたが「じいちゃんみたいな農業をする」としか答えられず、焦りを感じていました。

そんなことから、農業大学校に進学した私は、小さいころからの夢を実現するため「資格の取得」「販売に関する知識習得」「スマート農業による省力化」の3つの計画を立て、将来に役立つ技術や知識を身につけたいと思い、日々取り組んでいます。

「資格の取得」では、私が目指している農業は、米麦、野菜といった土地利用型の農業であり、今後多くの作業機械を操作することが必要になると思うので、作業機械に関する資格はできるだけ取得したいと考えています。また、作業機械の免許があれば、耕作放棄地の再生や、ほかの農家の作業を手伝うことで農家同士の連携が図られ、地域での助け合いや地域活性化等にもつながると思います。

「販売に関する知識取得」では、今の時代、農家は作物を栽培して出荷するだけではなく、自分で商品化して、加工して、自ら販売していかないと経営の安定化は望めないと思います。そのためには、加工技術やPR方法、生産物のブランド化、新たな販路の開拓というものについて学びたいと考えています。そして将来は、地域ブランド化や地域農産物の加工にも取り組んで

みたいです。

「スマート農業による省力化」では、私の地域でもそうですが、全国的に農家は高齢化を迎え、さらに農業従事者は少なくなりつつあります。こうした中で、機械やICT、AIの力を借りて楽に、そして効率よく作業を進めることは農業の生産性をあげる面から必要だと考えているので、積極的に学んでいきたいです。

卒業後は、地域のお年寄りに土地を借りたり、耕作放棄地を再生したりすることで栽培面積を増やし、地域に根付いた法人をつくり、地域の農地を守る農業を目指していきたいと考えています。そして、先祖が守ってくれた大切な農地と、幼いころにみたがね色の絨毯が風に揺れる風景を百年先、いやそれ以上に残すことができる、そんな農業基盤を築けるような農家になりたいです。

農大での学び

高知県立農業大学校

園芸学科二年 野菜専攻

学生自治会長

中 島 功 旺



去年の1月、前年の自治会長である岡林司先輩に自治会長をやってみないかと薦められました。私は自分の中で人前につけての発表やリーダーシップを発揮することが苦手で、これをきっかけに克服しようと考え、翌月に自治会長を引き継ぎました。

昨年度に続いて今年も新型コロナウイルスの影響がありました。今年は「よさこい鳴子踊り特別演舞」や「四国農学連スポーツ大会」などに参加でき、ウィズ・コロナに向けての対策をしながらの1年になりました。

私が一番記憶に残っているイベントの「よさこい鳴子踊り」では、2年間の中止により、運営の方法、旗士などの振り付けの引き継ぎができていなかったなど、最初は本当にうまくいくのか不安でした。実際、学生側でもコロナウイルスにより、クラスターが発生することを危惧し、今年の「よさこい鳴子踊り」は不参加にしようという意見もありましたが、先輩方が受け継いできた伝統を引き継げなくなると考え

参加することになりました。取り組み始めてからは文化委員の2人と協力し、掲げるテーマを「再生」と決めてそこに向けて日々練習に励みました。また卒業した先輩や教職員を始め、さまざまな人に手伝ってもらい、教わることで、地方車の作成や踊りの振り付けの周知ができ、特別演舞という一大イベントを無事に終えることができました。

次にスポーツ大会です。どの競技も体育の授業を真面目にやっていたのですが、特に優勝したバレーボールとバドミントンのチームは放課後に集まって練習していました。その努力が報われる結果となつて良かったと思います。

先進農家等留学研修では、霧が多く、農大より気温が低い四万十町の農家のもとで、ニラの栽培や経営の工夫などを学んできました。四万十町のニラ栽培を初めて見て、電照設備の普及や保温性を高める工夫を将来農業をするときに、役立てていきたいと思っています。

私が自治会長になって勉強になったことは、意見をまとめることの難しさと協力してくれる仲間の大切さです。よさこいを通して、様々な意見を聞き、自身が両者のことを考え提案したことを受け入れてもらえなかったことや意見の食い違いがありました。仲間と協力することで意見をまとめることができました。

私はまず農業関連企業に就職をします。仕事をするにおいて農業資材などの扱い方を覚えたり、他の農家へ訪問

する時にさまざまな野菜の栽培方法や経営方法を知りたいと思います。そして人脈を増やし、より自身の知識を深めて、将来祖父の農業を継いだ時に自身がこれまで学んできたこと、体験したことを活用し、高知県の農業に貢献して盛り上げていきたいと思っています。

最後に農大では、選択した品目を栽培しプロジェクト活動を通して農業について学びます。しかし、進路は就農だけでなく関連企業への就職や、高知大学への編入学などまちまちですが、それぞれの進路先で農大で学んだこと、体験したことを大切にして活躍してもらいたいです。

先進農家等留学研修で

学んだこと

高知県立農業大学校

園芸学科二年 花き専攻

森 下 弥 咲



私は高知市春野町で花壇苗を中心に生産・販売しているM園芸で1か月半お

世話になりました。M園芸の栽培面積はハウスと露地合わせて5ヘクタールです。主要品目は、ビオラ、パンジー、



水稻の実習（溝切り作業）

クローバーで、他に観葉植物や多肉植物など、様々な品目を育てています。出荷先は、県内の花き市場にとどまらず、愛知県や大阪府や岡山県にも出荷しています。ビオラを主体にオリジナル品種を開発し続けており、大手の種苗会社を通して販売している品種もあります。また、自社の直営店での販売もあり、新聞の折り込みチラシで花苗のクーポン券を配布したり、SNSで情報発信したりと様々な層に対してPRを行っています。

研修期間は十月十五日から十一月末まででしたが、前半の十月末までは主にほ場で、十一月は主に直営店で作業しました。

ほ場ではまず花苗の多さに圧倒されました。行った作業で一番多かったことは花苗のスペーシングです。スペーシングとは、ポット苗を均一に並べて占有スペースを確保し、生育の均一化を図る作業です。ビオラ、パンジーなどは千鳥状に置きなおしていました。M園芸ではシステムトレイという枠のついたトレイを用いて、誰がスペーシングをしても間隔が均一になるよう工夫していました。大量の花苗を生産するM園芸では常にスペーシングや新たな苗を置く場所の確保が重要になり、たくさん運ぶ際にはトラックに載せて運んでいました。

直営店では、日々の灌水のほかレジのサポートなどを行いました。レジでは、販売した商品の袋詰めのみならず、

スタンプカードの確認や質問対応など、思った以上に仕事量が多かったです。

また、店舗のディスプレイは注意が必要で、花にはそれぞれ綺麗に見える向きがあるので、向きを揃えるなど意識して作業を行いました。どの作業をしているときにも、お客様から突然に質問を受けることがあり、対応に追われました。元々人と話すのは好きだったので、珍しい花や低木の灌水などの質問を受けたとき言葉に詰まったので、どんなお客様にも対応できるように、幅広い知識が必要だと感じました。今回の研修で特に勉強になったことは、三つあります。

一つ目は、発信力です。SNS、テレビ、チラシなどのマスメディアを見て来られる方が多くいました。特にクーポン券を持ってこられたお客様の中には、引き換え以外にたくさんのお花をお買い上げになる方も多くいらっしゃいました。その多くは新規ご来店の方々であり、広告がいかに重要かを考えさせられました。

二つ目は、コミュニケーションです。お客様の質問対応は当然のこと、レジでは作業量がとても多く、従業員同士で円滑に分業するためにも、普段からお互いのことを知っておく必要があり、日ごろのコミュニケーションはとても重要でした。

三つ目は、整理整頓です。ほ場では常に新しい苗が入り、そのたびに育った苗を運び出します。成長に個体差が

あるため、出荷は咲いたものから順にケースから抜かれていき、スペースができ、そのスペースも効率的に埋めることで新しい苗のスペースを確保しています。花屋でも同じく、スペースの確保が重要で、常に整理整頓を心がけて作業スペースを確保することが必要でした。

私は来年、害虫駆除関係に就職する予定です。農業関係ではありませんが、M園芸で得たコミュニケーションスキルや全体把握力が、実際に取引先のお客様に被害状況を聞く、駆除剤を把握することなどに役立つと考えています。また、個性豊かなオリジナル品種の開発に挑戦し続ける姿勢を見習って、私も新しいことにどんどん挑戦しようと思います。

最後に、研修でご指導してくださったM園芸の皆様には感謝申し上げます。ありがとうございました。



私が家業を継ぐ理由

高知県立農業高等学校

園芸学科 一年 野菜専攻

濱田 和希



私の両親は専業農家をしている。祖父の代までは米農家だった。両親の代

でビニールハウスを建て、施設園芸を始めたので、私には想像のつかない苦労があったことを自分で感じ、見てきた。両親は、はじめ花を栽培していたが、花は一本の価格が安く、十分な収入を得ることが難しいと考えた両親は、野菜に切り替えることにした。両親は農業に関係のある仕事や、学校を出ていくわけではないため、野菜の栽培も、一からのスタートだった。インゲン豆に切り替えたばかりの時は、決しいいと言える収量ではなかったそうだ。インゲン豆が安定したのは、三年目になったのこと。三年目には、特に水分の量に気を付けて、栽培してきた。インゲン豆の収量は安定してきたが、収入が思うように得られなかったため、違う野菜の栽培に挑戦しようと思ひ、キュウリに変更したそう。キュウリは、ハウスの中の温度も湿度も非常に高いため、栽培するにあたって、少し抵抗がある野菜ではないかと思う。それにキュウリは病気に弱く、父

は不安が大きかったと言っていた。キユウリは一年目から、ある程度の収量を得ることができ、今でも病気による大きな被害はないようだ。それはやはり、両親が今まで培ってきた、農業の知識や経験の賜物だと思う。私も将来は、両親の行っているハウスを継ぎたいと考えている。私が初めて農業をやりたいと言ったのは、小学校の時です。両親は私の話を真剣に聞いてくれた。父は喜んでくれたが、母は反対だったそうだ。母が反対したのは、自分たちのような大変な苦勞を、子供にさせたくないからだ。大切にされているなと思った。それと同時に両親の農業を継ぐことは、生半可な気持ちで考えてはだめだと思った。農業を継ぐうえで、知識や経験がとても大切な事は知っていたので、農業高校に入学し、農業について学んだ。農業は自分が思っているよりもずっと難しく、作業も大変で両親の仕事に肌で感じる事が出来た。その後、現在通っている農業大学校に入学し、経験を積んでいる。

農大では、一人一人がプロジェクトを考え、ハウスを持つことが出来るので、貴重な経験が出来ているなど実感できる。私がプロジェクトとして選んだ野菜はトマトだ。それには二つ自分なりに理由がある。一つは、将来自分が両親のハウスを継ぐときに、育てられる野菜の選択肢の幅を増やしたいと思ったからだ。二つ目は、収量アップするためにはどうすれば良いか、自

分考えた結果を出したかったからだ。私は現在、大玉トマトをNターンの栽培し、省力化を行い、Nターンの二本仕立てにも挑戦している。二つの理由から、キユウリとは別の野菜を農業大学校で栽培しているが、自分で植物を育てる難しさを非常に感じている。今は両親が苦勞していた気持ちや、大変さを少しは理解できたかなと思っっている。私が農業をやりたいと思った理由は、小さい時から両親が農業をやっているのを見てきて、多くの苦勞と同じくらい農業の楽しさや、達成感を感じている両親を見てきた。両親の作る野菜を消費者の方が、「おいしい」や「また買いたい」など温かい言葉を両親にかけているのを見て、両親が苦しいのになぜ農業を続けてこられたか、分かった気がした。私のハウスで栽培しているトマトも、赤く食べごろの実も出来た。その時友達がおいしいと言いながら食べてくれるのを見て、非常にうれしく感じ、両親に近づけたかなと思える瞬間でもあった。まだまだ売り物として、出せるほどのきれいな果実は多いとは言えないが、収量アップさせるためには、どうすれば良いかを考えている。自分で考えていることを先生や友達、両親に共有しアドバイスや意見をもらい、プロジェクトが良い結果で終わるように日々頑張っている。両親が私に与えてくれた夢は、農業だ。卒業後は、一度農業関連企業などに就職したいと考えている。現在、

農業機械関係の会社に入社し、機械の構造や流通などについて学べたら、非常に良い経験になると考えている。就職し広い視野を持つことも、とても大事だと考えているからだ。実際、両親も元々は農業とはほとんど関係のない仕事をしていて、今農業をやっている中で、役に立つことも多いそうだ。これからは将来継ぐ時に、自分の武器になるものが一つでも多くなるようにしたい。農業には農業にしかない楽しさややりがいがあり、それを多くの人にも知ってもらいたいと思っている。将来、高知の農業がもっといい方向に発展するように、自分なりにできることをしていきたい。

将来を描く私の農業魂

高知県立農業大学校
園芸学科一年 野菜専攻

廣井寿明



私は、将来実家の農業を継ぎたいと考えている。農業に興味を持ち始めたのは3歳の頃からで、私が生まれ育った南国市は農業がとて盛んな地域です。そこで我が家は祖父の代から農業をしています。私が幼いころから祖父

のもとで栽培管理などを見たり、聞いたりして次第に農業に興味を持ち始めた。そして、祖父に教わり、畑での作物栽培に挑戦するようになった。学校から帰るとすぐ作物の成長を確認する。どのように変化したか、果実の特徴などを見ながら、収穫をする。その日収穫した野菜は、夕方の食卓に並ぶ。家族と食事中にどこでとれた野菜かの話になり、母親は私が育てた野菜だよと紹介してくれた。

自分が育てた野菜が食卓に並び、家族が喜んで食べてくれることが、私には嬉しかった。作物の栽培の楽しさ、食の大切さを感じながら、現在も自分の畑で夏野菜、冬野菜など一年を通して栽培している。育てた野菜は、休日には自宅の前で販売をする。すべて100円で販売し、手ごろな価格なので地域の方々にも人気になっている。

高校1年生の時、先生からの勧めで高知県立高知農業大学校のオーブンキヤンパスに行った。高知県の農業の最先端技術が学べ、かつ実習時間が50%であることに魅力を感じた。高校卒業後は、農業大学校に進学したいと決めた。受験をし、現在一年生として学業に励んでいる。

農大でのプロジェクト課題は、「土耕栽培における大玉トマトの品種比較」で土耕栽培での大玉トマトの糖度を6〜7度に上げたいと、日々手入れをしている。手入れだけではなく、生育過程で病気、害虫による被害を極力



実習(トマトの整枝作業)

なくすため、実習中は、葉、茎などをよく観察するよう自分で心掛けています。

さて、就農後の私の目標は、農業と福祉をマッチングした農福連携を考えたい。農福連携とは、障害者が農業分野で活躍することであり、自信や生きがいを持って社会参画を実現していく取り組みである。最初に興味を持ったのは高校二年生頃で、障害者施設内の一角に畑があり、サツマイモや夏野菜などが数多く育てられていた。障害者の方たちが農業をしながら笑顔になるのを見て、やりがいのある仕事だと思った。後になって農福連携という言葉を知り、勉強していく内に私の目標となった。

高知県内で福祉を取り入れた、農業をしている市町村や自治体などを調べた。高知県香美市の取り組みを知り、

その係の方に連絡したら、会って直接話を伺えることになった。「私は、将来農業と福祉をマッチングした農福連携を実現したいと考えているのですが、それなりにリスクがつきものなのでしょいか」と一つ質問したところ、係の方から「まずは障害者に、どれだけ寄り添えることができるのかです。」「受け入れる人数は先ずは一人から、そして農業の規模を増やすのではなく、先ずは小規模からスタートすることです。余裕があれば規模を増やすといいし、働き手も増やすといい。」とのアドバイスを頂いた。

私は将来農福連携で、障害者や引きこもりの方を雇用し、一人ひとりに寄り添い、それぞれに合った作業や環境を整えていきたいと考えている。育てた野菜は、道の駅や農家の直売所で私たち自ら消費者に販売する。また、近所の小学校へ給食の材料として提供したり、食の大切さや農家の苦労などを学べて、野菜収穫体験もできる施設にしたい。

農大で学べることはすべて学ぼうと思う。将来の農業経営で後悔のないように、色々と農大の先生方に教えて頂きながら、残りの一年を農大で過ごす。卒業したら五年ほどベテラン農家のもとで、トマトやキュウリの栽培方法を学ぶ。そして、小規模から農福連携をスタートし、一人ひとりに寄り添い、障害者や引きこもりの方が社会に参加できる場をつくる。また、農業に

関わることで笑顔になる人を一人でも増やしたい。農福連携を通して、地域活性化に取り組み、将来の担い手として地元に貢献する。農業や伝統を未来に残して、地域に愛される人材になりたい。それが私の農業魂だ。

私の夢

香川県立農業大学校

野菜園芸コース 一年

濱崎 みか



私の実家はみかん農家です。小さい頃からとてもおいしいみかんを作ってく

れる祖父や祖母が大好きで自慢でした。現在は、父が経営を継ぎ、おいしいみかんを作っています。

小学生のころから、お正月や夏休みには、父に連れられ祖父の家に行き、みかんの作業を手伝っていました。作業の手伝いをする中、中学生の時にみかんがおいしい一方で「坂が急で作業がきつい」「高齢化が進んでいて跡継ぎがいらない」などの課題があり、耕作放棄地が増えていることを知りました。そこで、この地域のみかんを消費者に広め、耕作放棄地が広がっている現実を知ってもらおう。また、私自身が後継

者になり農業に取り組み、地域をアピールすることで他の若い人を呼び込み、一緒に産地を守っていきけるのではないかと思います。みかん農家を継ぎたいと考えてようになりました。

そのような思いもあり、高校は農業経営高校を選択し、農業の道に進むことに決めました。高校では、道具の名前や専門用語、肥料や農薬の名前、成分、使用方法など農業に関する基本的な知識をはじめ、作物ごとの肥料の成分量や、作物の生産に適した土づくりなど品目に適した栽培方法を学びました。また、

三年時に選択する専攻では、みかんについてより詳しく学びたいと考え、迷わず果樹を選びました。授業では、座学や実習を通してミカンやカキ、ブドウなどについて栽培や出荷調整の方法など詳しく学びました。

高校卒業後は、さらに農業に関する知識と技術を学ぶため、香川県立農業大学校に進学しました。専攻は果樹ではなく野菜園芸コースを選びました。みかん農家を継ぐと決めたにもかかわらず、野菜コースを選択したのには、大きな理由が二つあります。一つは、果樹は野菜と違い、品種更新などで改植をすると、苗木を植えてから収穫までに数年かかること。また、災害で果樹が被害を受けた時には復旧に時間がかかることです。その点、野菜は、単年で収穫できるものがほとんどで、露地野菜などは、施設が不要で比較的



栽培が終了したほ場の後片付け

コストがかからないものもあり、果樹の収穫ができるまでのつなぎとして収入をカバーできると考えました。もう一つの理由は、野菜を栽培する際の土づくりや病害虫、機械の使用方法など、果樹とは違う知識や技術を知ること、広い視野に立つて果樹の栽培方法を考えることができると思ったからです。果樹の技術を深く極めることももちろん大切ですが、野菜の視点から見ると、果樹でも応用できるような技術などに気づくこともできると思っています。現在、農業大学校に入学して八か月が過ぎようとしています。高校では学ぶことのできなかった野菜の栽培や収穫の方法を座学と実習を通して日々勉強しています。

将来、学校で学んだ知識を生かし、みかん農家を継ぎたいと考えています。私が目指す農業は、手間をかけ

質の高いおいしいみかんを家族で作ることです。野菜は、農業をするにあたって自分の視野を広げること、みかんの経営を補うことを目的とした部門と考えています。

父の口癖に「みかんは自分が手間をかけたらかけた分だけ、おいしくなっ

てかえってくる、手間暇かけて育てる子供のようものだ。だから手を抜いてはいけない」という言葉があります。私は祖父から受け継いだ父のその言葉をずっと聞きながら手を抜かず、絶対にいいものを、とにかくおいしいものを作りたいと考えています。

小規模農業の次の形

香川県立農業大学校

野菜園芸コース 一年

本 條 健 吾



現在、大規模経営体や法人に対しては、多くの人が可能性を感じ、力を尽くして

いますが、家族経営のような小規模経

営体には、あまり未来がないと思われるように感じます。しかし、私は多くの人がより豊かな食生活をし、日本の食料生産をより強くするために、小規模経営をうまく活用することも重要ではないかと考えています。

特に近年は、IT技術の発達により個人が直接つながることができるようになりました。そのため、大規模な生産流通により成り立つ農業だけでなく、個人がお互いに必要なものを小規模に作りながら生活を成り立たせていくという「どこでもできる新しい集落営農」のような農業があってもよいと考えています。

家族経営のような小規模経営体は、もともと日本で主となる農業形態であり、多く存在します。しかし、そのような経営体では特に高齢化が進んでおり、「利益が上がらない」「後継者がいない」等の理由で生産活動を諦める、あるいは規模を小さくして趣味のような形で運用する生産者が増えています。このような人々の生産能力を捨てることは、食料自給率が低く推移している日本では見過ごすことができないと思います。

そのため、小さな生産力をネットワークで省力的につなげ流通させる仕組みを作ることは、有意義であると考えます。

例えば次のようなサービスがあるとどうでしょうか。個人単位で生産者を登録できるアプリを使い、その日に収穫された生産物の画像と量を記入する。

その後、自動運転車などが地域を回り、各農家から生産物を収集していく。そして、その日の収量から適切な価格をつけて必要としている地域の人に素早く配達する。このようなサービスがあれば、生産者、消費者ともにメリットがあるのではないかと思います。

昔であれば、個人間の取引はコストがかかりすぎるため、かなり小規模な村の中でのやりとりに限定されることになり、現実的ではありませんでした。しかし、現在はIT技術を活用して生産者は何をどれだけ作ったかすぐに計算することができ、消費者もインターネットを介して簡単に商品を選び、距離や時間を気にせず取引することが可能です。また、自動運転車やドローンなど輸送手段の発達により、人を使わず食料の出荷や集荷、配達ができるようになると思います。これらを用いることで小さな農業と消費者をつなげる流通ネットワークを構築していくことが将来的にできると思います。

小さな農業をつなげる流通ネットワークが将来実現可能になるとして、どのようなメリットがあるか考えてみたいと思います。まず、生産者のメリットとしては、今まで取り扱われていなかった品目の販売や少量での取引が可能になるので、販売のチャンスが広がると思います。

消費者のメリットとしては、幅広い選択肢から購入したい品質と値段の商品を手に入れられることがあげられま



ホウレンソウの収穫

す。少し形が悪くても値段の安い商品を選ぶことや、豪華な食事にするために品質の高いものを買うなど幅広い選択が可能になります。

最後に社会全体のメリットとしては、現状では有事や災害の際に交通網や食料供給の場がダメージを受けた場合、末端に食料が行きわたらなくなる危険性がありますが、小さな農業形態が地域に散在している場合、大きな供給場所との連絡が絶たれても持続して食料を供給することができるため、セーフティ機能としても貢献できると思います。

今後、日本では人口が減少し、休耕地は増えていくと思います。そんな中、多くの小規模経営体が適切な農地をもち、多様性ある農業に取り組み、活発に交流できる「過去の農村」のような

生き方は、時代に逆行しているようにみえて、労働力が減る中でも変化に強く幸福度の高い人生を送るために必要だと思います。そのような生き方をより効率的に実現可能なものにするために、「小規模農業×IT技術」は、いつか農業をやっていく上で、私自身も目指していきたい一つの形となっています。

これからの農業

香川県立農業大学校

花き園芸コース 一年

蓮井 渉太



私は、高校から農業高校に入り、今は香川県立農業大学校で農業について学

んでいます。将来は、花に関係している職業に就きたいと思っています。それまでは、田植えや稲刈りの手伝いをしたぐらいで、農業のことはほぼわかりませんでした。最初は戸惑うことがたくさんあり、失敗することがありました。しかし、三年間したこと鉢花の難しさや花の特徴も徐々にわかるようになってきました。そして今は農業大学校で切り花の基本を学んでいます。今では大まかな作業のやり方はわかっ

てきて、農業の知識がだいぶついたと自覚しています。ただ、耕運機などは、家であまり使う機会がなくなかなか慣れません。学校の講義や実習では、知らない言葉もたくさんあり、これからも大変だなと思っています。

農業のイメージは、「一年三六五日休みがないと思う」や「農業を仕事としてやりたくない」という意見があるそうです。私も農業は忙しいと思います。農家は高齢化しており、農業人口の減少と高齢化はどんどん進んでいます。高齢者の方が多い農業者、自分の体力がなくなり、後を継ぐ人もおらず、農業を辞めてしまう人もいます。そのため若い人に少しでも農業をしてもらい、現状維持または向上していくことが必要だと思っています。

ところで、日本人の主食であるお米は、私の住んでいる香川県で主に栽培されている品種は、「コシヒカリ」、「ヒノヒカリ」、「おいでまい」、「あきさかり」などがあります。これら四つの品種は集荷計画よりも多くの生産量をあげているそうです。ただ、一方でここ最近米を食べる人が少なくなっており、生産者が多く米を生産しても高く売ることができず、売れ残りが増えていると聞いています。この問題を解決するために、SNSなどで情報発信すること大切だと私は考えます。例えばインスタグラムで米の写真を景色と一緒に撮影することで「インスタ映え」のようなことになれば、お米のことを若

い人に知ってもらい身近に感じてもらえたら、米の消費拡大につながるのではないかと私は考えます。

また、近年は農業をする人がおらず、農地が余っている地域もあり、耕作放棄地の拡大が懸念されています。昔は耕作する人が多く、近所の人との土地の貸し借りはあまり進みませんでした。最近では、農地が余っているため、規模拡大したい場合は、農業委員会や農地機構を通じて借入することが可能となっています。しかし、農業を続けていくことや、農地を活用するためには、近所の人たちの協力がなくとできません。近所の人と協力することで、規模拡大も進みやすく、また、日頃からの信頼関係ができていれば、何かトラブルがあった時に助けてもらうこともあると思います。このように農業を



カーネーションの出荷調整

行うには、自分だけでなく、周りの人々と協力することが大切だと私は思います。

昨年、農家実習で花きの農業法人に行きました。そこでは、学校では見たこともない多種多様な花々がありました。社長は話題も知識も豊富で、いろいろな話を聞くことができ、とても刺激になりました。そこで働く従業員の人もすごい人ばかりで、貴重な経験となりました。

これからの農業は若い人が盛り上げていくことが大切です。私もその一人として、学ぶことがまだまだたくさんありますが、花に関する技術や知識をもっと身につけ、将来農業関係の仕事に就けるよう努力したいと思っています。

農業の『知らないこと』を『知ってもらおう』

香川県立農業大学校

果樹園芸コース 一年

青 井 大 知



私は、現在香川県立農業大学校で農業に関する実践的な知識を学んでいます。

非農家で大学まで農業に触れていなか

った私にとってかなり刺激的な日々が続いていますが、その中で農業においても生産者と消費者の距離があまりにも離れすぎているという問題点に気づきました。

果樹園芸コースでは、週3日朝早くから実習に参加して、日差しが強い中での肥料散布や除草作業。ブドウの実の形を整える花穂整形では、繊細な作業で手先の器用さが求められます。これらの過程を果たして消費者は知っているのでしょうか？

私自身、入学するまで多くの農作業は機械で行われ、これほど多彩な作業が必要なものとは思っていませんでした。多くの消費者は、以前の私のように漠然と知っているか、全くもって何も知らないという人が多いのではないかと考えます。

人々は『知らないこと』にはあまり関心がなく、もしその問題が取り挙げられても注目することがありません。家やお店で食べる料理の食材に何が使われているか、詳しく把握している人はどれほどいるでしょうか。そんな状況のため、食や農に関することが話題になっても何の関心も向けることが出来ず、近年問題となっている食品の大量廃棄や農業従事者の減少に繋がっているのではないのでしょうか。

私は、『知らないこと』を『知ってもらう』ことでこの問題を解決できるのではないかと思い私なりに考えてみました。それは、サブスクリプション

制度を導入した農業サービスをはじめることです。

サブスクリプションとは、定額で一定の期間に何度でもサービスが受けられることです。現在は主に音楽ストーリーミングサイトや動画配信サービスで利用されています。

私自身も通学中の電車では音楽配信サービスを使って音楽を聴き、家ではその日の気分で動画配信サービスのオリジナルドラマや映画をみています。私はとても利用しやすいサービスだと考えています。

このサブスクリプション制度を農業にどのように導入し、利用できるのかを説明します。駅の近くや商業施設の屋上に農地を設置し、月額料金を支払った人に利用してもらいます。アクセスのよい立地のため、仕事の帰りやショッピングの際空いた時間に利用してもらうことが出来、それと同時に多くの人に目がつくため興味を持ってもらえるはずです。

また、営農指導者を各施設に派遣し、未経験の方でもゼロから農業を学べるようにし、道具や種子、肥料等は、あらかじめ取り扱うものを指定しておき、そのなかからそれぞれ利用者が必要なものを選んで購入できるようにします。

こうすることで、支援を受けながら利用者の好みで何を栽培するのか、どれくらいの規模で栽培するのか等、自由に農業が体験できる環境を作ることが出来ます。その後、収穫できた作物

は利用者に持ち帰ってもらおうようにすると、持ち帰った収穫物を家族や知り合いに分けることで利用者以外にも農業に関する興味や関心を広げることが出来るはずです。

さらに、もしかすれば利用者の中には本格的に農業をはじめてみたい、農業法人等で働いてみたいと考える人も出てくるかもしれません。そこで専門の相談員を配置し、農業を新規ではじめたいと考えている利用者には補助金や候補地、なにを栽培するのかの相談や、農業法人と企業提携を結び就業先を紹介することもできる場を設けます。

サブスクリプションと農業を組み合わせることで、気軽に農業を学べる場を設け、さらには新たな農業従事者を確保につなげることができると考えます。



カキの収穫

将来につながる 農業の魅力を考える

香川県立農業大学校
畜産コース 一年

山 本 大 晴



農業就業人口は年々減少の一途を辿っており、あわせて高齢化が速いスピード

で進んでいることは今や常識となっています。また、一方で、最近では四十四歳以下の新規就農者が増加していることも事実です。今後、さらに増加傾向が継続すれば、日本の農業界にも明るい光が差し込んでくるのではないのでしょうか。

就農する若者が増えている理由は、大学等を卒業して、当たり前のようになんか就職できた時代は終焉を迎え、まだまだ自分の希望する仕事に就けない人達が多いからでしょう。この様な人たちがなんとか職を得るために目を向けた職業のひとつが農業というわけです。

地方の活性化を図るため、若者を農業へ呼び込もうと自治体も努力してきましたし、親族に農家がない人でも農業の勉強ができるように、色々の研修制度を設けてもいます。

さらに、食の安全性に目を向ける人が増えているのも理由のひとつで、無農薬、有機栽培等、生産者の顔が見え

る安全な野菜を購入したいという消費者ニーズが、若い就農者の増加にひと役買っています。なお、科学やIT技術の進歩により、農業が学問として認識されている時代となってきたのも、若い人達を農業へ誘っているのでしょう。そんな私も農業に携わりたい若者の一人なのですから。

そこで、自分なりに、農業の魅力を考えてみました。

一、収穫時に達成感が味わえる。
栽培から収穫までの生育過程に寄り添った頭脳労働と肉体労働が必要で、かなり難易度が高いので、収穫時の達成感は格別です。

二、自己裁量の範疇が広い。
会社勤めと違い、労働者でありながらも、経営者としての裁量が求められる、販売戦略も自己判断で決定できま



肥育牛の体調確認

す。自分のスタンスに見合った取り組みができるのが農業です。

三、スローライフが満喫できる。

これは農業の醍醐味ともいえます。会社内での忙しい生活や複雑な人間関係に悩むことも少なく、田舎暮らしが堪能できるのです。

四、人間社会に貢献している実感がある。

食えることは生きること、生きることとは食えること。これらに直接携わる農業は、他の職種に比べて満足度が高いと思います。

農業の魅力について自分の考えを書きましたが、農業が大変な仕事であることに変わりはありません。いざ就農できたとしても、栽培や経営がうまくいかずに、途中で離農してしまう新規就農者も多いと聞きます。

農業も、他の自営業と何ら変わりません。農業の技術を学ぶのはもちろんのこと、経営者としての感覚を養うことも重要です。

そのため、私は香川県立農業大学校へ入学したのです。本校では、実習をメインにしたカリキュラムが組まれており、まさに実践的な農業技術が取得できると思っています。

就農に際してのハードルも、農政の対応によって、ひと昔前と比べたら格段に下がってきています。農業が厳しい仕事であることに変わりはないのですが、業種や職種に関係なく、本来自営業は厳しいものだと思います。

現在は、インターネットが隔々まで普及して、自分なりにアレンジした働きやすい環境を整えることも可能になりましたが、農業技術の基本的な学習は不可欠でしょう。

私は、将来農業関係に従事したいので、二年間という短い期間ですが、農業大学校で常に努力していく姿勢を貫きたいと考えています。

